

東アジアにおける済州民俗

竹田 旦*

1. 比較研究の立場

(1) 村と民俗

民俗とは村の暮らしの中に育成・継承されてきた伝統的な文化である。したがって、民俗学では村を訪ねて民俗資料を採求することから学問が始まる。村の暮らしぶりは決して単純ではなくて、社会・経済・信仰・芸能・言語など多くの分野から構成されている。民俗文化も、これらの諸分野にわたり、しかもそれらは交錯しつつ複雑な仕組みを成している。そのために、民俗調査にはかなりの時間を掛けて、総合的な把握が要請されるのである。1つの民俗文化が、その村の暮らしにおいて、どのような地位を占めているかを承知することは、民俗学研究の原点ともいえる。

しかし、村は孤立しているわけではない。隣接の諸村とはもちろん、近くの都市とも緊密な関係を保持しながら暮らしを立てている。すなわち、暮らしの基盤も一定の地域に広がっていくのである。その結果、広い地域内に文化の交流を起し、類似した民俗伝承を生むことになる。そこで民俗調査も、1村だけに止まらずに、ある一定地域に広げる必要性が起こってくる。その一定地域の範囲については、場所や条件によって異なるだろう。たとえば面・邑など、少し広げて郡・市などの行政区域や、あるいは離島・諸島などを1つのまとまった単位とする見解も成立するだろう。そして、このような地域的広がりを持つ伝承に対して、民俗学では比較研究という方法を採用する。比較によって地域差が時代差、すなわち歴史の変遷を示すものであることが判ってくる。

さらに視野を拡大して、一定地域の外との比較も重要である。この比較によって、その地域の民俗が占める地位を究め、文化的特性を把握することができるからである。済州島の民俗に対しても、これこそ特性だと認識するためには陸地部との比較を待たなければな

* 創價大 教授

らない。そうした比較によって、ある種の民俗に、たとえば「済州型」と「陸地型」といった対照的な類型を立てることができることになる。

(2) 比較民俗学の成立

済州島と陸地部との間では、あくまでも韓国内の比較であり、一国民俗学という範疇を越えるものではない。そこで、地域外との比較については、もう一段と視野を拡大して、国際的な比較が必要となる場合が起こってくる。とくに、中国・韓国・日本の3か国間の比較研究が最近急速な進展を見せており、これが「比較民俗学」と名づけられた学問の立場である。この方法によってこそ、済州島の民俗文化が、東アジアに占める位置づけをより鮮明に打ち出し、その特性を一層明確に指摘することが可能となろう。

表題の「東アジアにおける済州民俗」という課題も、実は比較民俗学的な考察を企図したものである。もとよりこれら3か国では、国だけでなく民族が異なり、歴史・文化・言語も独自である。こうした相違を乗り越えて比較を可能とする基礎には、3か国の間には長い歴史の過程に深い文化交流がつづき、とくに同じ文字を用いる漢字文化圏に属してきたことが挙げられる。このような比較の立場は、済州島の地理的位置からも補強されよう。すなわち、四方を海に囲まれたこの島は、韓半島はもとより、日本とも中国とも一衣帯水の距離にある。そして、済州島は海路を通じて東アジアの諸地域と直結され、古来歴史の上にその名称がしばしば登場してきた。交通路という点では、海路は陸路よりも迅速かつ容易に大量の物資や人員を移動させることができる。したがって、船による交通・交易は歴史の上でも大昔から発達しており、それは文化の運搬にも大きな役割を果たしてきた。民俗文化も例外ではありえず、海路による伝播に注目しなければならない。

済州島と同様、離島という地理的位置にある日本の沖縄でも、最近中国・韓国の研究者を交えた国際的な比較研究が盛んである。沖縄の民俗文化については、日本本土との比較研究だけでは十分とはいえない。沖縄は、「琉球」と呼ばれた昔から東西南北に船を走らせ、交通・交易によって暮らしを立ててきた。当然、文化の交流も盛んで、現在の沖縄民俗の中に外国から受容したものを採ることは容易である。

そこで、本日の発表において具体的な題目として、①死霊結婚、②分割祭祀という2つの民俗伝承を提起してみたい。この2つは、私自身が長年研究を進めてきた課題であり、しかも済州島がいずれにも重要な地位を占めているからである。

2. 死霊結婚

死霊結婚とは、死者と死者、あるいは死者と生者を結婚させる慣習をいう。この慣習は世界各地に分布し、文化人類学ではghost marriage、韓国では死後結婚、死後婚、死婚、**죽은 きり**など、中国では冥婚、冥配、鬼婚、陰婚などと呼んでいる。日本でも、沖縄に“グソー ヌ ニービチ”（後生の婚礼という意味）という呼称がある。ここでは死霊結婚と総称しておこう。

(1) 韓国の死霊結婚

韓国では、結婚もせず若くして死んだ総角・処女の霊魂は、この世に未練や怨恨を残して、あの世に行き着けずに、中空でさまよっているといわれる。そして、事あるごとに遺族や関係者の身边に舞い戻ってくるそうだ。たいてい家族の誰かが急病や事故に遭い、あるいは事業の不振、家畜の急死などが起こり、何事かと占い人に見てもらったところ、「若死した者の冤魂のあたり」と告げられて驚くといった状況である。そのために、このような死者には、特殊な葬法を営んだり、しばしばshamanを招いて慰霊・解冤の巫儀を催してもらったりする。しかし、何よりも効果が高いのが、死んだ総角・処女の2人を結婚させることだといわれる。これは単なる話題にとどまらずに、たいていの村で1つや2つの実例を見出しえるほどである。

濟州島でも、死霊結婚の事例は各地で見聞される。これを陸地部の慣習と比較してみると、主要な点でいくつかの相違があることに気付く。その要点を挙げてみると、以下のようである。

(a)慣習の目的 陸地部では死んだ2人の「慰霊・解冤」を第一とするのに対して、濟州島ではそれを否定はしないが、むしろ男家側に養子を迎えて後継者を立てるための前提、すなわち「入養・立嗣」の条件作りを優先させる。

(b)儀礼の内容 儀礼の一部として、処女の遺骨を総角の墓に移して合葬するなど、遺骨の処理を重んずるのが濟州島の特徴である。そのような儀礼は、陸地部では珍島など全羅南道にしか事例が見当たらない。陸地部の他の道では、死霊結婚に際して二人の遺骨はもちろん墓に近寄ることさえもほとんどないといった状況である。

(c)儀礼の主宰者 陸地部ではshamanもしくは民間宗教者が主宰者になるのが通例で、死霊結婚といえばこのような者たちを真先に連想させるようである。しかし、濟州島では必

ずしもこのような者たちの関与を必要とせず、両人の遺族や知人たちだけで儀礼を執行する場合の方が多い。

(2) 死霊結婚の比較民俗学

東アジアでは、中国の死霊結婚が「冥婚」の呼称とともに以前からよく知られてきた。したがって、死霊結婚の比較民俗学では、中国との比較に焦点を据えざるをえない。しかし、広い国土の中国では、その呼称にも内容にも地域的な差異が基だしい。ここでは、華北・華中・華南（台湾を含む）の3地域に分けて比較を試みよう。

(a)慣習の目的…東アジア各地とも、ほとんど若死した総角・処女の慰霊・解冤を目的に挙げている。そのためにこそ、この慣習は起こったという方が適当かもしれない。したがって、死霊の管掌に巧みな特殊技能者としてshamanらが登場してくることにもなる。ところが済州島では、むしろ入養・立嗣の条件作りを優先し、必ずしもshamanの関与を必要としない。これは韓国では異質の伝承ともいうべきであろうが、実は類例が華北に求められる。たとえば、山東省歴城県冷水溝荘という村では、「陰親をしないで過繼子をもらうことはできない」と明確に、養子を迎える前提に死霊結婚を催すことを述べている（中国農村慣行調査刊行会編『中国農村慣行調査』第4巻、東京・岩波書店、1955、p. 139）。ここに華北と済州島とは、死霊結婚の目的において一致するのである。

なお、華中・華南方面からの報告にも入養・立嗣が大なり小なり触れられており、中国では各地域ともこれを意識しない所はないらしい。しかし、韓国の陸地部や日本では、死霊結婚にこの目的は現れてこない。

また、慰霊・解冤型の慣習が卓越しているのは、中国では華南、とくに台湾である。その点で、陸地部の慣習は台湾と類似している。しかし台湾では、処女の死霊を祭るために生存男性を求める「人鬼聯婚」、すなわち男生女死という生者と死者の死霊結婚である。このような類型は、華北にも、また韓国や日本の沖縄にも認められない。

(b)儀礼の内容…2人の遺骨処理を重視するのが、やはり華北の慣習である。前掲、冷水溝荘では、遺骨を移して合葬する以外には特別な儀礼を催さないと報告している（同上、第4巻、pp. 75, 87, 139）。そして、河北省昌黎県侯家宮という村では、死霊結婚を「娶骨屍」と呼んでいる（同上、第5巻、1957、p. 134）。いったいに華北では、若死した男女は仮埋葬だけで、死霊結婚を挙げてはじめて祖墳に移葬されるふうである（たとえば山東省

歴城泉路家荘、同上、第4巻、p.362)。このような遺骨処理型の儀礼は、華中・華南方面からは報告されていない。この方面では、神主に対する祭祀の引継を重んずる「位牌重視型」で、台湾では死霊結婚を「娶神主」とも称している。すなわち、「遺骨重視型」は、中国では華北の特色で、ここに再び濟州島と華北との一致が認められるのである。

なお、沖縄では、「後生の婚礼」といえば、結婚式を挙げずに死んだ夫婦・婚約者などに対して、遺族が改めて婚礼を催すものが多くを占め、儀礼の最後に女の遺骨を男の墓に移して合葬させるふうである。

(c)儀礼の主宰者…華北における前掲の慣行調査報告書では、死霊結婚にshamanが関与する事例が全く報告されていない。調査者にshamanに対する関心が薄かったのかもしれないが、そうした者の関与が弱かったことも確かであろう。濟州島でも、もちろんshamanや占い人たちが全く関与しないとはいえないが、たいていは彼らを招請しないと報告されている。逆に、韓国では陸地部、中国では華南、とくに台湾ではshamanの関与が顕著である。日本の死霊結婚では、沖縄ではユタ、東北地方ではオナカマなどと呼ばれるshamanの主導のもとに進められるのである。

以上を要するに、死霊結婚の慣習は東アジア3か国において類似と相違とが交錯している。韓国に中心を置いて要約すれば、(a)目的、(b)内容、(c)主宰者の3点において、濟州島と華北、陸地部と華南（とくに台湾）との共通が目立つのである。

3. 分割祭祀

(1) 韓国の分割祭祀

韓国では、祖上祭祀は「4代奉祀」が通例で、(a)4代祖までに対する家祭として忌祭と茶礼、(b)5代祖以上に対する墓祭として時祭を捧げる。そして、前者の忌祭と茶礼については、宗家の宗孫が祭主に就任し、祖上各位の祭祀を全部執行するのが一般である。濟州島でも4代奉祀を実施しているが、支系の者でも1世代に3人以上の祭官が揃えられる限り、その祭官たちの4代祖を時祭に移行しないならわしで、宗孫にとっては5代祖・6代祖まで家祭を継続する場合が現れてくる。さて、この島の祖上祭祀の特徴は、何よりも4代祖までの各位に対する祭祀を宗系・支系の家の間で分割することである。これが「分割祭祀」と呼ばれる慣習である。模式的に言えば、亡父の忌祭を長男、亡母の忌祭を次男、亡父の茶礼を三男、亡母の茶礼を四男がそれぞれ分担することから始まる。もちろん子息

の数は一様ではないから、実際には適宜に配分される。済州島では、忌祭を「祭祀」もしくは^{시가}茶礼を^{명절}名節と呼ぶ。茶礼は元旦・寒食・端午・秋夕と年4回挙げるふうで、最近では寒食・端午の2回を省略することも少なくない。茶礼のうち、とくに高祖父母に対するものを^{대명절}大名節と称して重視する。兄弟の間に分割された祭祀は、それぞれの子孫に継承されていく。この継承の過程においても、分担の比重を検討してさらに再配分される。したがって、世代を重ね、後孫に引継されていくにつれて、誰が誰のどの祭祀を担当するのか、きわめて複雑な様相を呈することになる。

分割祭祀の事例は、韓半島の南部を中心に陸地部にも分布している。とくに、全羅兩道の珍島では、それが済州島と同じく慣習として伝承されている。やはり、長男が父親の忌祭を、次男が母親の忌祭を分担することから開始されるものである。ただし、珍島では3代奉祀が原則で、しかも茶礼は分割祭祀の対象に加えない。したがって、3代にわたって子孫に引継されるとはいえ、済州島と比べて分割の様相ははるかに単純といえる。

(2) 日本の分牌祭祀

日本でも、死者・祖先の祭祀を兄弟（本分家）の間で分担する慣習が伝承されている。すなわち、父親が死ねば長男が喪主となって葬式をおこない、母親が死ねば次男が喪主となって葬式を挙げることから分担が始まる。父親の遺骸は本家の墓地に、母親の遺骸は分家の墓地に埋葬されることも多い。そして、死後のいろいろな祭祀も兄弟（本分家）の間で分担して挙行される。この場合、まず「位牌」を2個作り、父親のものは長男、母親のものは次男へと分属されることから、「分牌祭祀」という学術用語が付けられている。一般に、夫婦は揃って同じ家で同じ子息（通例は長男、すなわち本家の相続人）によって祭られ、同じ墓地の同じ墓碑に入るのに対して、分牌祭祀の慣習では、夫婦でありながら死後は位牌を別にし、属する家・墓を異にするのである。さらに次男の分家では、しばしば母親をもって分家初代とするふうである。

日本では、人が死ねば直ちに白木の「白位牌」を作って祭壇に立て、49日経てば漆塗りの「本位牌」（内位牌・家位牌ともいう）に作り直すことになっている。つまり、死者から祖上へ、死霊から祖霊への昇格を49日とするわけである。死者・祖上の祭祀は、常に位牌を中心に実施される。満1年の忌日の祭祀を1周年（または1年忌・1回忌）といい、それ以後年忌として3、7、13、17、25、33年目に祭祀をおこなう。たいてい33年忌を最終の年忌とし、これを終えれば位牌を墓に納めるか、焼くか、川に流すかなどして処分し

てしまう。その後の祖上はどうなるのか、民間伝承の限りでは必ずしも明確ではないが、ともかく祖上は個性を失い、祖霊の群れに入るものらしい。祖霊の群れに対しては、各家庭で、毎年陰7月15日（現在ではたいてい陽8月15日）の「盆」や春秋の彼岸に自家に迎えて祭祀を行うならわしである。分牌祭祀を慣習とする地域では、これらの年忌や盆・彼岸の祭祀も本分家間で別個に営まれるわけである。

4. 構造的基盤の分析

(1) 考察の前提

死霊結婚にせよ分割祭祀にせよ、東アジアにおいて類似と相違が生じていること自体は承認されよう。次には、そのことが何を意味するかを考察しなければならない。ここで、考察の前提とすべき基本認識として、(a)国際的な文化交流は、一般に衣食住などの物質文化では起こりやすいのに、家族・親族などの社会構造や、信仰・祭祀などの精神文化ではなかなか発現しない、(b)1つの民俗伝承は孤立するものでなく、他の諸分野に関連する、という2点を提起しておきたい。

したがって、濟州島の死霊結婚が中国華北の慣習と一致し、分割祭祀が日本の分牌祭祀と共通することについても、事実を承知した上で、その意義を追究しなければならない。とくに、これらの慣習が、いずれも家族の構造、親族の連合、家系の継承、財産の相続、婚姻習俗、死霊・祖霊の祭祀などと密接に関連していることを看過してはならない。ここでは分割祭祀と分牌祭祀だけを取り上げ、それを支える構造的基盤の分析を試みたい。

(2) 「夫婦家族」の構造

分牌祭祀の慣習は、西日本から中部日本の各地にわたり、さらに東日本にまで広い範囲に点在している。これらの地域では、夫婦は死んでから初めて分牌祭祀の取扱いを受けるのではなく、生存中に長男家と次男家に分属し、老夫婦が別れ別れになって暮らす事例も少なくない。もちろん、家長権や主婦権を子息に譲渡してからのことで、「隠居」の慣習の一種として「分住隠居」と名付けられている。そして、分住隠居を始めれば、やがて分牌祭祀を導くことはいうまでもない。

隠居の慣習は、太平洋岸の東日本・中部日本各地から西日本にかけて、広い地域に分布している。これを慣習とする地域では、社会構造に顕著な特色を表している。とくに家族

の構成を「夫婦家族」（核家族）、すなわち1組の夫婦とその未婚の子女に限定するのである。1家族に2組以上の夫婦が含まれそうになると、上の世代は隠居して別居し、別の世帯（食口）を設けるならわしである。別居隠居の典型は、同じ屋敷内でも別棟の隠居屋に移り、食事や経済を別にし、「夫婦家族」ごとに暮らす点にある。このような別居隠居では、両親が隠居屋に移る時、次男以下の子女を連れて行く場合が多い。やがて子女を全部分家・養子に出し、婚出させれば、はじめて老夫婦は安楽な退隠生活に入ることができるわけである。そして、老いるとともに、扶養を受ける子息の家に移り、前述のように父親は長男家、母親は次男家へと分かれ、「分住隠居」を形成することにもなる。

さて、済州島の家族制度も、日本の隠居地帯と一致する部分が少ない。たとえば、この島でも長男の結婚を契機に、親夫婦と長男夫婦は同じ屋敷内で住居を分け、暮らしを別にする慣習である。やはり、「夫婦家族」の形成を導くことになる。その際に親夫婦が家長権・主婦権を子息・嫁に譲渡するか否か、この点が日本の別居隠居の慣習との分かれ目となるだろう。済州島でも、次男以下の子女は両親といっしょに暮らし、やがて分家・養子に出、婚出していく。その後、はじめて老夫婦は真の退隠生活を迎えることができる。このような実態は日本の隠居別居の慣習と酷似するものといえる。

(3) 均分相続と家の理想

済州島では、分割祭祀の経済的基礎として、諸子息への財産相続について均分相続を理想とするといわれる。逆に均分相続を実施する限り、祭祀が分割されるのは当然だとも説明される。このような財産相続の慣習は、また日本の分牌祭祀の地域と一致を示すのである。日本の財産相続は、一般に長男に60%も70%も与えて優遇するもので、とくに東北日本に偏って認められる。しかし、別居隠居や分牌祭祀の地域では、均分相続を理想としており、西南日本に濃厚である。東北日本では、長男が本家を継承し、財産の大部分を相続するのが通例で、その本家は村の中で大きく構え、分家層はみな本家に従属して暮らすといった「大家族」主義を採用する。しかし、西南日本では、均分相続を受けた子息たちがみな小さくとも独立の家を作り、それぞれが競い合って力を発揮していくといった「小家族」主義を優先させる。こうして家の繁栄を目指し、大家族主義と小家族主義のどちらを採るか、家の理想が分かれてくるのである。この点でも、済州島は陸地部とは一致せず、むしろ西南日本との類似が目立つ。そして、このような構造的基盤の上に発現したのが、済州島の分割祭祀であり、日本の分牌祭祀であると考えられよう。

東아시아에 있어서의 濟州民俗

竹田 昶 (Takeda Akira)

강 태국 역*

1. 比較研究의 立場

1) 마을과 民俗

民俗이란 마을 사람들의 生活 속에서 육성·계승되어 온 전통적인 文化이다. 따라서 民俗學에서는 마을을 방문하면서 민속자료를 탐구하는 것부터 학문이 시작된다.

마을 生活相은 결코 단순하지 않으며 사회·경제·신앙·예능·언어 등 많은 분야로 구성되어 있다. 民俗文化도 이러한 諸分野에 걸쳐, 서로 교차하면서 복잡한 짜임으로 형성되어 있다. 그러므로 民俗調査에는 많은 시간을 들여서 종합적인 파악이 요청되는 것이다. 하나의 民俗文化가 그 마을 사람들의 生活에 있어서 어떠한 地位를 차지하고 있는가를 아는 것은 민속학 연구의 원점이라고 말할 수 있다.

그러나 마을은 고립되어 있는 것은 아니다. 인접해 있는 여러 마을과는 물론 가까운 도시와도 긴밀한 관계를 유지하고 있다. 즉 생활기반이 일정한 지역으로 넓혀져 가는 것이다. 그 결과 넓은 지역 내로 문화교류가 일어나, 유사한 민속전승을 일으키게 된다. 따라서 민속조사도 한 마을에 머물지 않고, 어떤 일정지역으로 넓힐 필요성이 있게 된다. 그 一定地域의 범위에 대해서는 장소나 조건에 따라 달라진다. 예컨대 面·邑 등 조금 넓혀서 郡·市 등 행정구역이나 혹은 離島·群島 등을 하나의 종합된 단위로 하는 방법도 성립될 것

* 제주대 일어일문학과 교수

이다. 그래서 이러한 지역적 확대를 갖는 전승에 대해서 민속학에서는 比較研究이라는 方法을 채택한다. 비교에 의해서 지역차, 시대차 즉 역사적 변천을 나타낸다는 것이 밝혀지게 된다. 좀더 시야를 넓혀 일정지역 외의 것과 비교도 매우 중요하다. 이 같은 비교에 의해서 그 지역의 民俗이 점유하는 位相을 究明하고, 문화적 특성을 파악할 수 있기 때문이다.

濟州島 民俗에 대해서도 이것이야말로 특성이라고 인식하기 위해서는 육지부와 비교해보지 않으면 안된다. 그러한 비교에 의해서 어떤 종류의 民俗으로, 예를 들면 「濟州型」, 「陸地型」이라는 대조적인 유형을 세울 수 있게 되기 때문이다.

2) 比較民俗學의 成立

제주도와 육지부의 사이에서는 어디까지나 한국 내의 비교이며 한 나라의 民俗學이라는 범주를 넘어서는 것은 아니다.

그래서 地域外의 것과의 비교에 대해서는 좀 더 시야를 넓혀서 국제적인 비교를 필요로 하는 경우가 생기게 된다. 특히 中國·韓國·日本 3個國 간의 비교연구가 최근 급속한 진전을 보이고 있는데, 이것이 「比較民俗學」이라고 명명된 학문이다.

이러한 방법에 의해서만이, 濟州島 民俗文化가 東아시아에서 차지하는 位相이 보다 선명하게 나타나게 되어 그 특성을 한 층 더 명확하게 지적할 수 있게 될 것이다.

表題의 「東아시아에 있어서의 濟州民俗」이라는 과제도 실은 比較民俗學의 인 고찰을 기도한 것이다. 물론 이 3個國에서는 나라뿐만 아니라 민족이 다르고, 역사·문화·언어도 독자성을 지니고 있다. 이러한 相違點을 초월해서 비교를 가능하게 할 수 있는 기초에는, 3個國 간에 오랜 역사적 과정 속에 깊은 문화 교류가 이어져 있고 특히 같은 文字를 사용하는 漢字文化圈에 속해 있다는 點을 지적할 수 있다.

이러한 비교는 濟州島의 地理的 위치로도 보강될 수 있을 것이다. 즉 四面이 바다로 둘러싸인 이 섬은, 한반도는 물론 日本·中國과도 一衣帶水의 거리에 있다. 그래서 濟州島는 海路를 통해서 東아시아의 諸地域과 직결되고 있기 때문에 古來로부터 역사상에 그 명칭이 자주 등장해 왔다.

交通路라는 점에서는 海路는 陸路보다 신속하고 또한 쉽게 대량의 물자나 인원을 이동시킬 수 있다. 따라서 배로 인한 交通·交易은 옛날부터 발달했고, 그것은 文化의 운반에도 커다란 역할을 해 왔다. 民俗文化도 예외일 수는 없고, 海上路에 인한 傳播에 주목하지 않으면 안된다. 濟州島와 같이 離島라는 지리적 위치에 있는 日本의 沖繩(Okinawa)에서도, 최근 中國·韓國의 연구자들을 참여시켜 국제적인 비교연구가 활발하게 이루어지고 있다. 沖繩의 民俗文化에 대해서는 日本 本土와의 비교연구만으로는 불충분하다. 오끼나와는 「琉球(Ryukyu)」라고 불리웠던 옛날부터 동서남북으로 배를 띄웠고, 교통·교역에 의해서 살아 왔다. 따라서 당연히 文化交流도 활발해서 현재 오끼나와 民俗 속에는 外國으로부터 수용된 문화를 쉽게 찾아낼 수 있다.

그래서 오늘 發表하는 구체적인 題目으로서 ① 死靈結婚 ② 分割祭祀 라는 두가지의 民俗傳承을 提起해 보고자 한다. 이 두 가지는 필자가 오랫동안 연구해 온 과제일뿐만 아니라 제주도도 어느 편으로 보나 중요한 地位를 차지하고 있기 때문이다.

2. 死靈結婚

사령결혼이란 死者와 死者, 혹은 死者와 生者를 결혼시키는 관습을 말한다. 이 관습은 세계 각지에 분포하고 있으며, 文化人類學에서는 ghost marriage, 한국에서는 死後結婚, 死後婚, 死婚, 죽은 혼인 등, 중국에서는 冥婚, 冥配, 鬼婚, 陰婚 등으로 불리우고 있다. 日本에서도 오끼나와에서는 “gusou nu niibichi”(後世의 혼례라는 의미)라는 호칭이 있다. 여기서는 이를 死靈結婚이라고 총칭해 두자.

1) 韓國의 死靈結婚

한국에서는 결혼도 못하고 젊어서 죽은 총각·처녀의 영혼은 이 세상에 미련이나 원한을 갖고 있어서 저 세상에 못가고, 허공에서 떠돌아 다닌다고 말한다. 그래서 일이 있을 때마다 유족이나 관계자들 주위에 되돌아 온다고 한다. 대개 가족중 누군가가 급병이나 사고를 당했을 때나 사업의 부진, 가족의 급사 등이 일어났을 경우 무슨 일인가 하고 점장에게 점쳐보면 「젊어서 죽

은 귀신의 재앙(탈)」이라는 말을 듣고는 놀라곤 한다. 그 때문에 이러한 死者에게는 특수한 葬法을 마련하거나 때로는 Shsaman을 불러다가 慰靈·解冤 곳을 한다 그러나 무엇보다도 효과가 있는 것은, 죽은 총각·처녀 두사람을 결혼시키는 일이라고 말한다. 이것은 단순한 風聞으로만 그치지 않고, 대개 마을마다 한 두가지 實例를 찾아볼 수 있다.

濟州島에서도 死靈結婚 事例는 각지에서 듣게된다. 이것을 육지부의 관습과 비교해 보면, 중요한 몇개의 서로 다른 점을 발견하게 된다. 그 要點을 열거해 보면 다음과 같다.

a) 慣習의 目的: 육지부에서는 죽은 두 사람의 「慰靈·解冤」을 첫째로 여기는 데 대해서 제주도에서는 그것을 부정하지는 않지만 오히려 男家側에서 養子를 맞이하여 후계자를 두기 위한 前提, 즉 「入養·立嗣」를 우선으로 한다.

b) 儀禮의 內容: 의례의 일부로서 처녀의 遺骨을 총각의 墓에 옮겨 合葬하는 등, 遺骨처리를 중요시하는 것이 제주도의 특징이다. 이러한 의례는 육지부에서는 珍島 등 전라남도에도 한해서만 그 사례를 찾아볼 수 있고 他道에서는, 死靈結婚할 때 兩人的 遺骨은 물론 墓 가까이 가는 것도 거의 없을 정도이다.

c) 儀禮의 主宰者: 육지부에서는 Shaman 혹은 民間宗教者가 主宰者로 되는 것이 통례이기 때문에 死靈結婚이라고 하면 이러한 사람들은 최우선으로 연상한다. 그러나 제주도에서는 꼭 이러한 사람들의 관여를 필요로 하지 않으며 兩人的 遺族이나 知人들 만으로 의례를 치르는 경우가 많다.

2) 死靈結婚의 比較民俗學

東아시아에서는 中國의 死靈結婚이 「冥婚」이라는 호칭과 함께 이전부터 잘 알려져 왔다. 따라서 死靈結婚의 比較民俗學에서는 中國과의 비교를 하지 않을 수 없다. 그러나 넓은 국토인 중국에서는 그 호칭이나 내용에도 지역적인 차이가 많다. 그래서 여기서는 華北·華中·華南(臺灣을 포함) 3地域으로 분리하여 비교해 보고자 한다.

a) 慣習의 目的: 東아시아 각 지역 대부분이 젊어서 죽은 총각·처녀의 慰靈·解冤을 目的으로 하고 있다. 그 때문에 이러한 관습이 생겼다고 말하는

것이 좋을지도 모른다. 따라서 死靈을 관장하는 데 능한 특수 기능자로서 Shaman들이 등장하게 된다. 그런데 濟州島에서는 오히려 入養·立嗣조건 조성을 우선으로 하기 때문에, 반드시 Shaman의 관여를 필요로 하지는 않는다. 이같은 현상은 한국에서는 異質의 전승이라고 말할 수 있으나 사실은 이같은 類例를 華北에서 찾아볼 수 있다. 예를 들면 山東省 歷城縣 冷水溝莊이라는 農村에서는 「陰親을 하지 않고 過繼子를 얻지 못한다」라고 명확하게 양자를 맞이하는 전제로서 死靈結婚을 하는 것을 말하고 있다(中國農村慣行調查刊行會編 「中國農村慣行調查」 第4卷, 東京, 岩波書店, 1955, p.139).

여기에서 華北과 濟州島의 死靈結婚의 목적은 일치한다. 또한 華中, 華南方面으로부터의 보고에서도 入養·立嗣가 크든 작든 언급되고 있으며 중국의 각 지역 모두가 이것을 의식하지 않는 곳이 없는 듯 하다. 그러나 韓國의 육지부나 日本에서는 死靈結婚의 이러한 目的이 나타나지 않고 있다.

특히 慰靈·解冤型 관습이 뚜렷한 곳은 중국의 華南(특히 臺灣)이다. 그 點에서 육지부의 慣習은 대만과 유사하다. 그러나 대만에서는 처녀死靈을 모시기 위해서 生存男性을 구하는 「人鬼聯婚」, 즉 男生女死라는 生者와 死者의 死靈結婚이다. 이러한 유형은 華北에서뿐만 아니라 한국이나 日本 오끼나와에서는 찾아보지 못한다.

b) 儀禮의 內容: 두 사람의 遺骨처리를 중시하는 것 역시 華北慣習이다. 前掲, 冷水溝莊에서는 遺骨을 옮겨 合葬하는 것 이외에는 특별한 儀禮를 올리지는 않는다고 보고하고 있다(同上, 第4卷, pp.75, 87, 139.). 그래서 河北省 昌黎縣 侯家營이라는 마을에서는 死靈結婚을 「娶骨屍」라고도 부르고 있다(同上, 第5卷, 1957, p.134).

華北에서는 젊어서 죽은 男女는 假埋葬만으로 死靈結婚을 올린 후에 비로소 祖墳에 이장하는 形式이다(예를 들면 山東省 歷城縣 路家莊, 同上, 第4卷, p.362.). 이러한 遺骨處理型 의례는 華中, 華南 方面에서는 보고되지 않고 있다. 이 地域에서는 神主에 대한 제사의 인계를 중시하는 「位牌重視型」으로서, 대만에서는 死靈結婚을 「娶神主」라고도 부르고 있다. 즉 「遺骨重視型」은 중국에서는 華北의 특색임과 동시에 제주도과 화북과는 일치한다.

더욱이 오끼나와에서는 「後生(來世)의 婚禮」라고 하면, 결혼식을 올리지 않고 죽은 夫婦·約婚者 등에 대하여 유족이 혼례를 올려주는 일이 많고, 儀禮

를 올린 후에는 女子遺骨을 남자 墓에 옮겨 合葬시킨다.

c) 儀禮의 主宰者 : 華北에 있어서의 前掲 관행 조사 보고서에서는 死靈結婚에 Shaman이 관여하는 사례가 전혀 보고되지 않고 있다. 조사자가 Shaman에 대한 관심이 적었는지 모르지만 Shaman의 관여가 약한 것은 확실하다. 제주도에서도 물론 Shaman이나 점장이들이 전혀 관여하지 않는다고는 말할 수 없지만, 대개의 그들을 부르지 않는다고 보고하고 있다.

그러나 逆으로 한국에서는 육지부, 중국에서는 화남 특히 대남에서 Shaman의 관여가 현저하다. 일본의 死靈結婚에서는 오끼나와는 Yuta, 동북 지방은 Onakama 등으로 불리워지는 Shaman의 주도하에 진행된다.

따라서, 死靈結婚 관습은 동아시아 3개국에 있어서의 類似와 相違가 교차하고 있다. 한국에 중심을 두고 요약해보면 a) 목적, b) 내용, c) 주체자 세 部面에서 제주도와 화북, 육지부와 화남(특히 대남)에서 공통성이 눈에 띈다.

3. 分割祭祀

1) 韓國의 分割祭祀

한국의 조상 제사는 「4代奉祀」가 통례로, (a) 4代祖까지의 家祭로서는 忌祭와 茶禮, (b) 5代祖 이상에 대한 墓祭로서는 時祭를 올린다. 따라 前者인 忌祭와 茶禮에는 宗家の 宗손이 祭主가 되고, 祖上各位 제사를 올리는 것이 일반적이다.

제주도에서도 4代奉祀를 하고 있지만, 傍系에게도 1世代에 3人以上의 祭官이 될 수 있으며 그 傍系가 4代祖를 時祭로 移行하지 않을 경우, 宗손은 5代祖, 6代祖까지 家祭를 계속 지낸다. 그리고 제주도의 祖上 제사의 특징은 무엇보다도 4代祖까지의 各位에 대한 제사를 宗孫·傍系사이에서 분할하는 것이다. 이것이 「分割祭祀」라고 불리우는 관습이다.

가령, 亡父의 忌祭는 長男이, 亡母의 忌祭는 次男이, 茶禮는 3남이나 4남이 하도록 분담하는 祭祀形態이다. 다만 설에 行하는 茶禮는 長男이 담당한다. 물론 자식들의 수가 똑 같지 않기 때문에 실제로는 적당히 배분된다. 제주도에서는 忌祭를 「祭祀」 혹은 「식개」, 茶禮를 「명질(名節)」이라고 부른다.

茶禮는 설날, 寒食, 端午, 秋夕 등 年4회를 지냈으나 최근에는 한식, 단오를 省略하는 경우도 많다. 茶禮에는 특히 高祖父母에 대한 것을 「큰 명절(大名節)」이라고 불러 重視한다.

형제간에 분할된 祭祀는 各者의 자손에게 계승되어 간다. 이 계승과정에 있어서 分擔하는 比重을 검토해서 다시 再配分하기도 한다. 따라서 世代를 거듭하고 후손에게 인계되어 가며는 누가 어느 분의 제사를 담당할 것인가 등 매우 복잡한 양상을 띄게 된다.

分割祭祀 事例는 한반도의 남부를 중심으로 육지부에도 분포되고 있다. 특히 전라남도 珍島에서는 제주도과 같은 관습으로 전승되고 있다. 즉 장남이 부친 忌祭를, 차남이 모친 기제를 분담하는 것으로 부터 시작된다. 다만 珍島에서는 3代 奉祀가 많고 茶禮는 분할제사 대상으로 넣지 않는다. 따라서 3대에 걸쳐 자손에게 인계된다고는 하나 제주도과 비교해 보면 분할의 양상은 매우 단순하다고 말할 수 있다.

2) 日本의 分牌祭祀

일본에서도 死者·祖上 제사를 兄弟(本分家 Honbunke) 사이에서 분담하는 관습이 전승되고 있다. 즉 부친이 돌아가시면 장남이 喪主가 되어 장례를 치르고, 모친이 돌아가시면 차남이 상주가 되어 장례를 치르는 것으로 분담이 시작된다.

부친 遺骸는 本家(Honke 宗家) 묘지에, 모친 유해는 分家(Bunke 아래가지) 묘지에 묻는 경우도 많다. 그리고 死後 여러가지 제사도 형제간이 분담해서 지낸다. 이 경우 우선 「位牌」를 2개 만들어 부친 것은 장남, 모친 것은 차남에게 나누어짐에 따라 「分牌祭祀」라는 학술용어가 붙여진 것이다.

일반적으로 부부는 함께 같은 집 같은 자식(通例는 장남 즉 本家の 상속인)에 의해서 모셔지고 같은 묘지에 있는 같은 墓碑에 들어가는 것에 反해서 分牌祭祀 관습에서는 부부이면서도 死後에는 位牌를 별도로, 소속하는 家·墓로 따로 따로 갈라지게 된다. 더욱이 차남 分家에서는 간혹 모친을 分家 1대로 삼는 경우도 있다.

日本에서는 사람이 죽으면 즉시 白木(木板) 「白位牌」를 만들어 祭壇에 세우고 49일이 지나면 옷칠한 「本位牌」(乃位牌, 家位牌라고도 함)로 교체 만드는 것

으로 되어 있다. 다시 말하면 死者부터 祖上으로 死靈에서 祖靈으로 昇格하는 시점을 49일로 잡고 있는 셈이다.

死者·祖上 제사는 항상 位牌를 중심으로 모셔진다. 滿1年 忌日 祭祀를 1周忌(혹은 1年忌, 1回忌)라 하고, 그 이후 年忌로는 3, 7, 13, 17, 25, 33年 째에 제사를 지낸다. 대개 33年忌를 최종 年忌로 삼고 이것이 끝나면 位牌를 墓에 넣거나 불태워 버리거나 혹은 하천에 떠내려 가게 처분한다.

그 후 祖上은 어떻게 되는가. 민간전승 차원에서는 반드시 명확하지는 않지만 다만 조상은 개성을 잃고 祖靈群 속에 들어가는 것 같다. 조령群에 대해서는 각 가정에서 매년 음력 7월 15일(현재는 대개 양력 8월 15일)의 「盆」(Bon, 조상을 제사하는 名節)이나 춘추의 彼岸(Higan: 춘분, 추분의 전후 3일씩 7일간)에서 자기 집으로 모셔서 제사를 지내는 것이 관습으로 되어 있다.

分牌祭祀를 관습으로 하는 지역에서는 이러한 年忌나 盆·彼岸제사도 本·分家 간에서 따로따로 모셔진다.

4. 構造的 基盤의 分析

1) 考察의 前提

死靈結婚이든 分割祭祀든 간에 東아시아에 있어서 類似와 相違가 있음을 확인하게 된다. 그 다음에 그것이 무엇을 의미하는가를 고찰하지 않으면 안된다. 여기서 고찰의 전제로 하는 기본인식으로는,

(a) 국제적인 문화교류는 일반적으로 衣食住 등 물질문화에서는 나타나기 쉬우나 가족, 친족 등 사회구조나 신앙, 제사 등 精神文化에서는 좀처럼 發現되지 않는다.

(b) 하나의 민속전승은 고립되는 것이 아니고 다른 여러 분야에 걸쳐서 관련된다는 點을 提起해 두고 싶다.

따라서 제주도의 死靈結婚이 중국 華北의 관습과 일치하고, 分割祭祀가 일본 分牌祭祀와 一致한다는 점에 대해서도 그곳 사정을 인식한 연후에 그 의의를 추구하지 않으면 안된다. 특히 이러한 관습이 가족구조, 친족관계, 가계제승, 재산상속, 혼인習俗·死靈·祖靈의 祭祀 등과 밀접하게 관련되어 있다는

것을 간과해서는 안된다. 따라서 여기서는 分割祭祀와 分牌祭祀만을 그 대상으로 그것을 지탱하는 구조적 기반의 분석을 시도해 보고자 한다.

2) 「夫婦家族」의 구조

분패제사의 관습은 西日本으로부터 中部일본 각지는 물론 동일본까지 넓은 범위에 걸쳐서 點在하고 있다. 이러한 지역에서는 부부가 죽어서 처음으로 분패제사 취급을 받는 것은 아니고, 생존시에도 長男家와 차남가에 分屬되고, 老夫婦는 헤어져서 별거하는 사례도 적지 않다. 물론 家長權이나 主婦權을 자식에게 양도한 뒤에 「隱居」(Inkyo)하는 관습의 일종이기 때문에 「分住隱居」라고 불리어지고 있다. 그래서 분주는거가 곧 분패제사로 이어진다는 것은 말할 필요도 없다.

隱居의 관습은 태평양 연안의 동일본, 중부일본 각지로부터 서일본에 걸쳐 넓은 지역에 분포하고 있다. 이를 관습으로 하는 지역에서는 사회구조면에서 현저한 특색을 나타내고 있다. 특히 가족구성이 「夫婦家族」(核家族), 즉 한쌍의 부부와 그 미혼자녀로 한정한다는 것이다. 한 집안에 2쌍 이상의 부부가 살게되는 경우 윗세대는 隱居해서 별거하고 다른 世帶(食口)를 만들게 된다.

別居隱居의 전형은 같은 집안(屋敷, Yashiki: 대지)에서도 別棟의 隱居屋(별당)으로 옮겨, 식사나 경제활동을 따로하고 「부부가족」끼리만 살아간다는 점에 있다. 이러한 別居隱居에서는 양친이 隱居屋으로 옮길 때 차남 이하 자녀를 함께 데리고 가는 경우가 많다. 그후 자녀를 전부 分家·養子로 내 보내거나 婚出하게 되면 처음으로 노부부는 안락한 隱居生活을 할 수 있는 셈이다. 따라서 늙어서 부양해 주는 자식집으로 옮겨 前述한 바와 같이 부친은 長男家, 모친은 次男家로 헤어져 「分住隱居」를 형성하게 되는 것이다.

그런데 제주도의 가족제도도 일본의 隱居地帶와 일치하는 부분이 적지 않다. 예를 들면 제주도에서도 장남의 결혼을 계기로 양친과 장남부부는 같은 대지(울타리) 안에서 살림을 따로 하는 관습을 들 수 있는데 이 경우 역시 「夫婦家族」의 형성으로 이끌어 가는 셈이 된다. 그때 양친은 家長權·主婦權을 子息·子婦에게 양도하는가 그렇지 않은가가 일본의 別居隱居 관습과 같고 다름의 분기점이 될 것이다.

제주도에서도 차남이하 자녀는 양친과 함께 살다가 分家·養子로 나가고 婚

出하게 된다. 그런 연후에 처음으로 노부부는 진정한 退隱生活을 맞이하게 된다. 이러한 형태는 隱居別居 관습과 매우 비슷하다고 할 수 있다.

3) 均分相續과 家(집)의 理想

제주도에서는 分割祭祀의 경제적 기반으로서 자식들에 대한 재산상속을 均分相續해주는 것을 理想으로 삼는다고 한다. 이러한 재산상속의 관습은 일본의 分牌제사 지역과 일치하고 있다.

일본의 재산상속은 일반적으로 장남에게 60~70%정도 주어서 優待하는 것이 관행인데 특히 東北日本에 편중되어 나타나고 있다. 그러나 別居隱居나 分牌祭祀지역에서는 均分相續을 理想으로 삼고 있으며 西南일본에 많다. 東北日本에서는 장남이 本家를 계승하고 재산의 대부분을 상속받는 것이 통례로 그 本家は 마을 안에서 집(구조상, 외관상) 모양을 제일 크게 갖추고 分家層은 모두 本家에 從屬되어 살아가는 式的 「大家族」主義를 採擇하고 있다. 그러나 西南日本에서는 均分相續을 받은 자식들이 모두 조그마한 독립된 집을 만들어 각각 경쟁하면서 살아가는 「小家族」主義 形態다.

이러한 집안의 번영을 목표로 하는 「대가족」주의와 「소가족」주의의 어느 것을 선택하는가에 따라 집안의 理想이 나뉘어지게 되는 것이다.

이런 點에서 제주도는 육지부와 일치하지 않으며 오히려 西南日本과 유사함이 눈에 띈다. 그리고 이러한 구조적 기반 위에서 나타나는 것이 제주도의 分割祭祀이며, 일본의 分牌祭祀라고 할 수 있을 것이다.